

Title	現代熊本市方言の主語表示
Author(s)	坂井, 美日
Citation	阪大社会言語学研究ノート. 2013, 11, p. 66-83
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/24757
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

現代熊本市方言の主語表示

坂井 美日

【キーワード】熊本市方言、主語表示、「ガ」と「ノ」、活格性、三立型

【要旨】

本論では、現代熊本市方言における主語マーカ―の使い分けを記述し、以下の点を指摘する。

- ①主語に立つ名詞句が人称名詞の場合は、述語の性質にかかわらず主語は全て「ガ」で表示される。人称名詞の階層におけるアラインメントは、典型的な対格主格型である。
- ②主語に立つ名詞句が人称名詞以外の場合、述語の性質がガ／ノ表示を決定する要因となる。この場合、他動詞述語文と意志自動詞述語文の主語は「ガ」でマークされ、一方、非意志自動詞述語文と形容詞述語文の主語は「ノ」でマークされる。すなわち、活格的な性質を有する(但し他動詞目的語は「バ」という別表示であるため、「活格型」ではない)。
- ③当方言では更に、敬語接辞やアスペクト辞を述語に付すことで「ガ」「ノ」の使用が変化する。その結果当方言は、一部の文法環境において、日本語としては希少な「三立型」のアラインメントを持つ。

1. はじめに

現代標準日本語において主語は、述語動詞の性質や、主語名詞句の性質にかかわらず、格助詞「ガ」によって表示される(ただし能動文かつ主節の主語の場合)。

- (1) a. {私／お父さん／太郎／犬…} ガ壺を{作った／買った／割った}。(他動詞文)
- b. {私／泥棒／犬…} ガ {走った／逃げた}。(意志自動詞文)
- c. {友人／犬…} ガ死んだ。／雨ガ降った。／花ガ枯れた。(非意志自動詞文)

現代標準日本語の主語マーカ―は上記のように「ガ」の一種であるが、熊本市方言では(2)のように、「ガ」というマーカ―と、「ノ(／ン)」というマーカ―の2種を用いる。

- (2) a. 太郎ガ壺バ割った(太郎が壺を割った)
- b. 花ノ咲いとる(花が咲いている)¹⁾

本論では、上記のような熊本市方言の2種の主語マーカ―について、その使い分けを記述し、また当方言の格配列(アラインメント)について検証を加える。

2. 先行研究

本節では熊本方言の主語表示について扱った先行研究を挙げ、整理する。

1) 以下本論では、熊本市方言の例文は漢字かな混じり文で記し、主語表示「ガ」「ノ」、目的語表示「バ」の部分はカタカナで表記する。また例文の後ろに()にて、対応する標準語訳を付す。

2.1. 秋山・吉岡（1991）：尊卑説

まず秋山・吉岡（1991）によると、熊本県（詳細な地域の限定はされていない）の主語表示は、主語名詞句のあらわす人物が敬意対象か、やや見下げる対象かによってガ／ノが使い分けられる、とされている。

(3) 秋山・吉岡（1991:211）

格助詞の『ノ』と『ガ』は、(中略) 古典語と同様に『ノ』は尊敬の場合に、『ガ』はやや見下げの場合にと使い分ける

挙げられている例文には、例えば次のようなものがある。

(4) カミナリサンの落ちらした（雷さんが落ちられた）（秋山・吉岡 1991:210）

(5) 墨汁ヤツがひっちーた（墨汁めが付きやがった）（秋山・吉岡 1991:210）

尊卑によるガとノの使い分けというのは、他の肥筑方言の記述（初島 1998 等）や、古典語においても指摘されてきたところであり²⁾、興味深い記述ではあるが、熊本方言に関する秋山・吉岡（1991）の記述には例文が少ないため、どのような文法的条件のもとで上記のような分布がおこるのか、確認と検討をすることができない。3 節に述べるように主語の表示は、名詞句の階層、述語の性質、統語環境によって変わる可能性があるため、詳細な検討が必要である。

2.2. 吉村（1994:2006）：叙述主語→ノ／大主語、焦点→ガ

吉村（1994:2006）は、熊本八代市方言のガとノを扱ったものである。当論文は、いわゆる日本語の「ガ／ノ交替」について「主語移動説」と「基底生成説」の検討をおこなうことを主眼としたものではあるが、そこに述べられる熊本八代市方言の主語表示の特徴を要約すると次のようである。

(6) 吉村（1994:2006）（例文の表記は吉村氏に従い、下線は坂井）

- a. 熊本八代方言では、主文／従属文に関係なく、述語の主語（「叙述主語」）をあらわす場合には一般に主格「ノ」が用いられる。

例 a) 東京の物価ノ高か

- b. 多重主語構文の大主語、あるいは「焦点解釈が可能な主語」の表示は「ガ」。

例 b) 東京ガ物価の高か（吉村 2006:202）

- c. 叙述主語（ノ表示）は大主語（ガ表示）を越えて文頭に移動できない。

例 c) (b の例に対応) *東京ノ物価ガ高か（吉村 2006:202）

吉村氏によると、熊本八代市方言では述語の主語を表示するのは一般にノであるとされる。しかし吉村氏が検討に際して挙げている例文は、連体節内の主語を表示したもの、主語名詞句が尊敬対象であるもの、敬辞のついた述語の主語を表示したもの、形容詞述語（多重主語構文を含む）の主語を表示したものに条件が偏っており、たとえば主節における他

2) 古くは頭昭の『古今集註』（平安末～鎌倉初期）をはじめ、ロドリゲスの『日本大文典』（近世初期 1604-08）や、富士谷成章の『あゆひ抄』（近世中期 1778）等に、尊卑によるノとガの使い分けが指摘されてきており、近年の国語学研究においても、古典語におけるノとガの尊卑による使い分けは指摘されてきたところである（橋本 1969、野村 1993 等）。

動詞文で主語名詞句が敬意対象でない場合の表示がどうであるのかという点にはふれられていない。

また、「大主語」や「焦点解釈が可能な主語」は、述語と名詞句の関係という項構造の問題だけではなく、トピックやフォーカスといった情報構造の関与する問題であり、格表示の問題とはレベルが異なる。主格の問題を扱うからには、まずは述語と名詞句の基本的な関係を整理する必要があると思われる。

2.3. 加藤 (2005) : 主格「ノ」／フォーカス「ガ」

加藤 (2005) を要約すると、以下のようである。

(7) 加藤 (2005)

- a. とりたて・強調の場合には「ガ」を用いる。

例 a) 請求書だけ が/*の届いたばい (加藤 2005:30)

- b. ガ／ノの使い分けには、尊卑よりもとりたて・強調の方が要因として強く働く³⁾

- c. 他動詞文 (語順 : AOV)、非能格自動詞文 (本論の意志自動詞)、状態述語文 (形容詞／形容動詞文、主格目的語文) の主語、および多重主語構文の大主語には、「ノ」を用いることができない。

例 c-1) 他動詞文 : 太郎が/*のその小説ばこーたばい

(太郎がその小説を買った)

例 c-2) 状態述語文 : 太郎 {が/*の} 野球 {が/の} じょうずたい⁴⁾

- d. 他動詞文では、語順を入れ替える (AOV→OAV) と「ノ」を主語表示として用いることができる。

例) (c-1 に対応) その小説ば太郎が/のこーたばい

- e. 状態述語文の主語と多重主語構文の大主語では語順を入れ替えても「ノ」を用いることはできない。

例) (c-2 に対応) * 野球の太郎がじょうずたい

* 野球が太郎のじょうずたい

* 野球の太郎のじょうずたい

- f. (d と e より) 語順によって容認度が変わるという点から、「ノ」「ガ」の使い分けは、その付接する名詞句の構造上の位置の違いを反映している («ガ」は [Spec,IP]以上の位置で認可され、「の」は vP 内で認可される)。

3) 加藤氏は、秋山・吉岡 (1991)の以下の例文を挙げ、その分析を根拠としている。

(22) 人形ん足でっっちゃ、三郎さんが作りよらすとに… (秋山・吉岡, 1991:47)

(22) では、動詞に「作りよらす」と尊敬表現が用いられている。にもかかわらず主語「三郎さん」は「の」ではなく「が」で表されている。もし「が」が卑下を表すために使われるのであれば、述語の尊敬表現とは相反するので、このような状況では使われないことになる。つまり、(22) は尊卑による使い分けよりも、強調という意味的な要因が強く働いていることを示した例であるといえる。 (加藤 2005:30)

4) 加藤 (2005:31) の (27) a~d をまとめた。

g. 熊本方言では「ノ」が唯一の主格である。「ガ」はフォーカスを表す標識である。

加藤（2005）の扱う「熊本方言」が、熊本のいずれの地域・世代・性別の方言データをどのように採集したのかは明記されていないが、少なくとも本論の熊本市出身のインフォーマントおよび熊本市出身の筆者の内省とは食い違う点があるようである。たとえば4節以降に示すように、本論のデータでは、語順を入れ替えても他動詞文では「ノ」を用いることができない。また、名詞句自体の性質が反映するか否かという点は言及されておらず、たとえば人称名詞と普通名詞とで同じ状況になるのか否かは示されていない。格表示は名詞句の性質によっても変わる可能性があり、その点も踏まえて検討すべきである。

2.4. 問題点の所在

秋山・吉岡（1991）も吉村（1994;2006）も加藤（2005）も興味深い論考であるが、いずれも主語表示を扱いながら、格配列の観点からの基本的な整理・検討はなされていない。主語表示は文法条件によって変化しうるものであり、細かな条件設定のもと検討すべきと考えられる。

よって本論では以下の枠組みを設定し、それぞれの条件において熊本市方言の主語表示および格配列について検討をおこなう。

3. 枠組み

3.1. alignment の類型論の種類

類型論的に、他動詞主語（以下 A）・他動詞目的語（以下 O）・自動詞主語（以下 S）を、同じ形で表すか、異なる形で表すかによって以下の6つのタイプがあるとされ、図示すると図1のようになる。

①能格－絶対格型（Ergative-Absolutive）

S と O を同じマーカー（絶対格 Absolutive）で表示し、A を別のマーカー（能格 Ergative）で表示するタイプ

②対格－主格型（Accusative-Nominative）

S と A を同じマーカー（主格 Nominative）で表示し、O を別のマーカー（対格 Accusative）で表示するタイプ

③三立型（Tripartite）

A、O、S を全て別のマーカーで表示するタイプ

④中立型（Neutral）

A、O、A を全て同じマーカーで表示するタイプ

⑤二重斜格型（Double oblique）

A と O を同じマーカーで表示し、S を別のマーカーで表示するタイプ

⑥活格型（Active-Inactive）

S の表示が、主にその動作の意志性によって分裂し、A と意志自動詞主語（active S）が同じマーカーで表示され、O と非意志自動詞主語（inactive S）が同じマーカーで表示されるタイプ

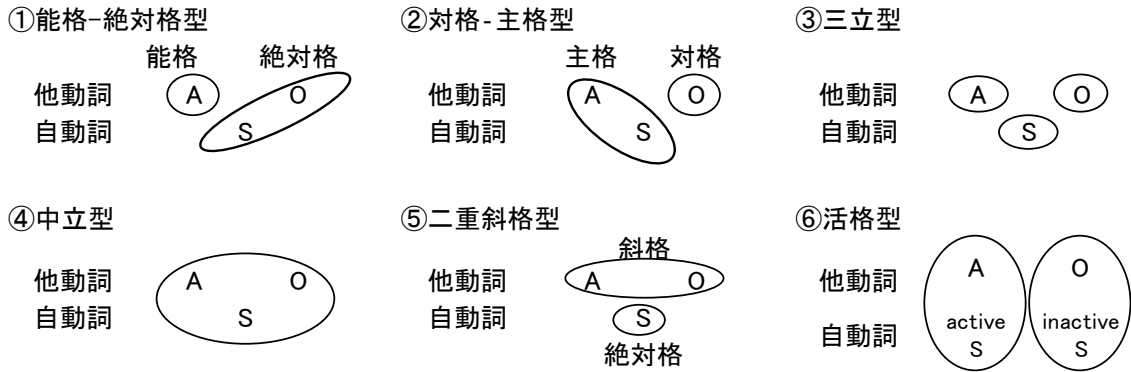


図1 アラインメント

本論ではこのような格の配列を、以下「アラインメント」と称す。

現代標準語は典型的な対格主格型であり、日本語の諸方言も同様であると思われがちであるが、近年は方言や古典語に異なる型の存在が指摘されつつあり、そのバリエーションは看過できない。本論では、熊本市方言のアラインメントが標準語のような対格主格型とは異なるということを指摘する。

3.2. 他動詞、自動詞、主語、目的語

本論では「他動詞」を、動作者をあらわす項（主語）と対象をあらわす項（目的語）の2項を有する動詞という意味で用いる。たとえば「壊す」「殺す」「買う」等である。

「自動詞」は、動作者または状態の持ち主（主語）の1項のみを有する動詞という意味で用いる。また、自動詞はその動作の意志性によって意志動詞、非意志動詞の二つのタイプに分けられる。意志動詞は「走る」「行く」「登る」等、非意志動詞は「死ぬ」「生まれる」「咲く」「降る」「いる」「ある」等である。

また他動詞主語・他動詞目的語・自動詞主語という用語は、角田（2009）に準じ、便宜上のラベルとして以下の意味で用いる。

他動詞主語：（典型的な）他動詞を述語とする能動文の動作者（略称：A）

他動詞目的語：（典型的な）他動詞を述語とする能動文の対象（略称：O）

自動詞主語：自動詞を述語とする能動文の動作者・状態の持ち主（略称：S）

3.3. 条件の設定

ケースマーキングとそのアラインメントは、一言語の中でも条件によって異なりうる。よく知られる mixed alignment の条件としては、名詞句階層、テンス・アスペクト、主節／従属節などがある（Garret 1990、Silverstein 1976、Dixon 1979、Marlett 1986、Harris 1990）。そのため、格組織の検討の際には、(a) 検討する条件を分け、(b) 条件毎に他動詞主語・他動詞目的語・2種類の自動詞の主語を調べる、という手順が推奨されている（cf.角田 2009）。

日本語の場合、連体節中の格表示には特殊な場合がある（ガノ交替、マーカーの表示／非表示）ため、今回は典型を見る目的から条件は主節に限定し、名詞句階層ごとにA・他O・active S・inactive Sのマーキングを検証することとする。

名詞句階層は基本的に Silverstein の NP Hierarchy に基づき、<人称名詞（一人称→二人称→三人称）→親族名詞・固有名詞→人間名詞→動物名詞→無生物名詞>の階層を用いるが、尊卑説をふまえ、人称名詞から人間名詞にかけては「目上」／「目下または同等」を分けることとする。

3.4. 保留

先行研究に指摘される焦点や大主語の問題は、述語と名詞句の関係たる格（項構造）の問題ではなくフォーカスやトピックといった情報構造という別のレベルの問題であるため今回は扱わない。またいわゆる総記の「が」（久野 1973 等）に相当する類も、排他性やフォーカスといった情報の付加であり、格とは別のレベルの問題である。よって今回は扱わず、調査文では主語以外の名詞句に疑問の焦点があたるよう工夫し、適宜総記解釈でないことを確認しながら進める。

4. 記述

本節の構成としては 4.1 節にてアスペクト辞なし且つ敬辞なしの条件で過去／非過去において検討し、4.2 節にて敬辞辞の有無による検討、4.3 節にてアスペクト辞の有無による検討をおこなう。結論を先取りすると、敬辞、アスペクト辞の有無によってアラインメントが変わることを指摘する。

以下、熊本市方言の主語表示ノとガの使い分けについて記述し、配列がどのようなかを示す。なおデータは著者（熊本市出身女性、1986 年生まれ、0-18：熊本市、18-22：奈良県、22~26：大阪府）の内省および、熊本市出身男性（1958 年生まれ、0-現在：熊本市）への調査に基づく。

4.1. 基本配列

まず、格配列に影響する可能性のあるアスペクトの接辞、および先行研究で指摘される尊卑にかかわる敬辞を排除した文における配列（以下基本配列と称す）について提示する。

先に表にて示すと、以下のとおりである。

表 1 熊本市方言のアラインメント（基本配列）

		人称			親族・固有				人間		動物	無生物		
		一人称	二人称		身内		外		同・下	上				
			同・下	尊	同・下	上	同・下	上						
他動詞	主語	ga	ga	二人称 の尊称 名詞なし	三人称 の使用 なし	ga	ga	ga	ga	ga	ga	ga	—	
意志自動詞	主語	ga	ga			ga	ga	ga	ga	ga	ga	ga	ga	—
非意志自動詞	主語	ga	ga			n(o)	n(o)	n(o)	n(o)	n(o)	n(o)	n(o)	n(o)	n(o)
形容詞	主語	—	—			n(o)	n(o)	n(o)	n(o)	n(o)	n(o)	n(o)	n(o)	n(o)
他動詞	目的語	ba	ba			ba	ba	ba	ba	ba	ba	ba	ba	—

典型的対格型
←
分裂S型
→

表では、二人称尊称に関しては該当する名詞がなく、三人称は基本的に使用しないため、欄があいている。一人称・二人称主語の形容詞文については、自然な文が作れないため、

保留としている。また、無生物の他動詞文、意志自動詞文は擬人的になってしまうため、除いている。

以下、具体的な例文を挙げながら説明を加える。

4.1.1. 名詞句が人称名詞の場合

まず、名詞句が人称名詞の場合であるが、これは動詞のタイプに関わらず、全て「ガ」で表示され、「ノ」は許容されない。なお、例文は非過去と過去のもの挙げているが、以下全体を通して非過去／過去による主語表示の違いは見られず、当方言のアラインメントにテンスは影響しないことがわかる。

次に示す(8)から(11)は他動詞「割る」による例文である。一人称と二人称とに違いはなく、そして語順を入れ替えても(a, b)、目的語を省略しても(c)、主語表示に「の」が許容されることはない。これは加藤氏のデータとは異なる結果であり、当方言では、語順の違いが主語表示に影響することはないようである。なお、他動詞目的語は「バ」で表示される。

(8) 一人称・他動詞 (非過去)

〔「いつになったら鏡餅を割るの？」の問いに〕

- a. 明日、私 {ガ/*ノ} そん鏡餅バ割るばい。(AOV)
(明日、私とその鏡餅を割るよ。)
- b. 明日、そん鏡餅バ私 {ガ/*ノ} 割るばい。(OAV)
(明日、その鏡餅を私が割るよ。)
- c. 明日、私 {ガ/*ノ} 割るばい。(明日、私が割るよ。)(AV)

(9) 一人称・他動詞 (過去)

〔「いつ鏡餅を割ったの？」の問いに〕

- a. 昨日、私 {ガ/*ノ} 鏡餅バ割ったと。(昨日私が鏡餅を割ったの。)(AOV)
- b. 昨日、そん鏡餅バ私 {ガ/*ノ} 割ったと。(昨日鏡餅を私が割ったの。)(OAV)
- c. 昨日、私 {ガ/*ノ} 割ったと。(昨日私が割ったの。)(AV)

(10) 二人称・他動詞 (非過去)

〔「いつになったら鏡餅を割るの？」の問いに〕

- a. 明日あーた {ガ/*ノ} そん鏡餅バ割りなっせ。(AOV)
(明日あなたがその鏡餅を割りなさい。)
- b. 明日そん鏡餅バあーた {ガ/*ノ} 割りなっせ。
(明日その鏡餅をあなたが割りなさい。)(OAV)
- c. 明日、あーた {ガ/*ノ} 割りなっせ。(AV)
(明日、あなたが割りなさい。)

(11) 二人称・他動詞 (過去)

〔「いつ鏡餅を割ったんだっけ？」の問いに〕

- a. 昨日、あーた {が/*の} 鏡餅バ割ったろ。(AOV)
(昨日、あなたが鏡餅を割ったでしょ。)

b. 昨日、鏡餅バあーた {が/*の} 割ったろ。

(昨日、鏡餅を私が割ったでしょ。)(OAV)

c. 昨日、あーた {が/*の} 割ったろ。(昨日、あなたが割ったでしょ。)(AV)

次に挙げる(12)から(19)は、自動詞文の例である。一人称と二人称とに違いはなく、また意志自動詞／非意志動詞の違いにかかわらず、全て「ガ」で表示される。

(12) 一人称・意志自動詞 (非過去)

[リレー順を決める文脈で「何番目に走るの?」の問いに]

3番目に私 {ガ/*ノ} 走るばい。(3番目に私が走るよ。)

(13) 一人称・意志自動詞 (過去)

[「何番目に走ったの?」の問いに]

リレーじゃ3番目に私 {ガ/*ノ} 走ったばい。

(リレーでは3番目に私が走ったよ。)

(14) 一人称・非意志自動詞 (非過去)

9時はおらんばってん、10時なら私 {ガ/*ノ} おるばい。

(9時は居ないけど、10時だったら私が居るよ。)

(15) 一人称・非意志自動詞 (過去)

[病院を指さしながら]

あん病院で私 {ガ/*ノ} 生まれたと。

(あの病院で私が生まれたの。)

(16) 二人称・意志自動詞 (非過去)

[リレーで何番目に走るかを決める]

1番目にあーた {ガ/*ノ} 走りなっせ。(1番目にあなたが走りなよ。)

(17) 二人称・意志自動詞 (過去)

[同窓会で運動会の思い出話をし「あの時何番目に走ったんだっけ?」の問いに]

あんときゃ、1番目にあーた {ガ/*ノ} 走ったったい。

(あの時は1番目にあなたが走ったんだよ。)

(18) 二人称・非意志自動詞 (非過去)

そぎゃん無理ばしとったなら、あーた {ガ/*ノ} 倒れちしまうばい。

(そんなに無理をしていたら、あなたが倒れてしまうよ。)

(19) 二人称・非意志自動詞 (過去)

[子供に教える文脈]

あん病院であーた {ガ/*ノ} 生まれたったい。

(あの病院であなたが生まれたんだよ。)

以上のように、名詞句が人称名詞の場合、主語マーカーは全て「ガ」であらわれ、そのアラインメントは典型的な対格-主格型といえる。

これは一見、現代標準日本語から考えると当然の結果のように思えるかもしれないが、しかし論を先取りすると、意志自動詞／非意志自動詞でガ／ノの使用に違いが出ず「ノ」が一切許容されないというのは、当方言においては、名詞句が人称名詞の場合の独特の結

果であり、記述するに値する現象である。

次節では、その他の階層についてデータを示す。

4.1.2. 名詞句が親族名詞～無生物の場合

続いて主語名詞句が親族名詞・固有名詞・人間名詞・動物無生物の場合であるが、これは述語の性質によって主語表示ガ／ノの使用が変わるようである。

4.1.2.1. 他動詞述語文主語

まずは他動詞述語文の例であるが、その主語は「ガ」で表示され、「ノ」は許容されない。そしてこれは、名詞句が尊敬対象であろうが、目下であろうが、影響はなく（ただし動詞句に敬辞が付いた場合は別である。cf.4.2）、また語順を入れ替えたり、目的語を省略したりしても結果は同様である。語順に関してはやはり加藤（2005）とは異なる結果である。

以下に挙げる（20）から（23）は親族／固有名詞の他動詞述語文の例である。目下である「弟／太郎」を主語名詞句とする（20）（21）と、目上である「じいちゃん」を主語名詞句とする（22）（23）に違いはなく、「ガ」しか用いられない。そして、語順を入れ替えても（a, b）、目的語を省略しても（c）「ノ」が許容されることはない。

（20）親族／固有（同等または目下）・他動詞（非過去）

[「いつになったらその荷物を送るの？」の問いに]

a. 明日、{弟／太郎_(弟の名前)} {ガ／*ノ} 送るもんね。

（明日、{弟／太郎} がその荷物を送るよ。）（AOV）

b. 明日、送るもんね {弟／太郎} {ガ／*ノ} 送るもんね。

（明日、その荷物を {弟／太郎} が送るよ。）（OAV）

c. 明日、{弟／太郎} {ガ／*ノ} 送るもんね（明日 {弟／太郎} が送るよ。）

（AV）

（21）親族／固有（同等または目下）・他動詞（過去）

a. {弟／太郎} {ガ／*ノ} 次郎だけバ殴った

（{弟／太郎} が次郎だけを殴った。）（AOV）

b. 次郎だけバ {弟／太郎} {ガ／*ノ} 殴った。（OAV）

（次郎だけを {弟／太郎} が殴った。）

c. {弟／太郎} {ガ／*ノ} 殴った。（AV）

（{弟／太郎} が殴った。）

（22）親族／固有（目上）・他動詞（非過去）

[「いつになったらその荷物を送るの？」の問いに]

a. 明日、じいちゃん {ガ／*ノ} 送るもんね。

（明日、じいちゃんがその荷物を送るよ。）（AOV）

b. 明日、送るもんね じいちゃん {ガ／*ノ} 送るもんね。

（明日、その荷物をじいちゃんが送るよ。）（OAV）

c. 明日、じいちゃん {ガ／*ノ} 送るもんね（明日じいちゃんが送るよ。）（AV）

(23) 親族／固有（目上）・他動詞（過去）

- a. じいちゃん {ガ/*ノ} 次郎だけバ殴った。
(じいちゃんが次郎だけを殴った。) (AOV)
- b. 次郎だけバじいちゃん {ガ/*ノ} が殴った。 (OAV)
(次郎だけをじいちゃんが殴った。)
- c. じいちゃん {ガ/*ノ} 殴った。(じいちゃんが殴った。) (AV)

また、人間名詞の場合も同様であり、卑下の対象である「泥棒」を主語名詞句とする (24) (25) と、目上である「先生」を主語名詞句とする (26) (27) に違いはなく「ガ」しか用いることはできない。そして、語順を入れ替えても (a,b)、目的語を省略しても (c) 「ノ」が許容されることはない。

(24) 人間（同等または目下）・他動詞（非過去）

- a. そがんとけ財布ば置いとったら、泥棒 {ガ/*ノ} 金バ盗むばい。
(そんな所に財布を置いていたら、泥棒が金を盗むよ。) (AOV)
- b. そがんとけ財布ば置いとったら、金バ泥棒 {ガ/*ノ} 盗むばい。
(そんな所に財布を置いていたら、金を泥棒が盗むよ。) (OAV)
- c. そがんとけ置いとんなら、泥棒 {ガ/*ノ} 盗むばい。(AV)
(そんな所に置いていたら、どろぼうが盗むよ。)

(25) 人間（同等または目下）・他動詞（過去）

- a. 泥棒 {ガ/*ノ} 窓バ割った。(泥棒が窓を割った。) (AOV)
- b. 窓バ泥棒 {ガ/*ノ} 割った。(窓を泥棒が割った。) (OAV)
- c. 泥棒 {ガ/*ノ} 割った。(泥棒が割った。) (AV)

(26) 人間（目上）・他動詞（非過去）

- a. 毎年、先生 {ガ/*ノ} 花バ植うっ。(毎年先生が花を植える。) (AOV)
- b. 毎年、花バ先生 {ガ/*ノ} 植うっ。(毎年花を校長先生が植える。) (OAV)
- c. 毎年、先生 {ガ/*ノ} 植うっ。(毎年校長先生が植える。) (AV)

(27) 人間（目上）・他動詞（過去）

- a. 先生 {ガ/*ノ} 壺バ割った。(先生が壺を割った。) (AOV)
- b. 壺バ先生 {ガ/*ノ} 割った。(壺を先生が割った。) (OAV)
- c. 先生 {ガ/*ノ} 割った。(先生が割った。) (AV)

また、動物名詞に関しても、結果は同様で「ガ」しか用いられず、「ノ」は許容されない。

(28) 動物・他動詞（非過去）

「そんなところに置いてたら、」

- a. 犬 {ガ/*ノ} そん壺バ割るばい。(犬がその壺を割るよ。) (AOV)
- b. そん壺バ泥棒 {ガ/*ノ} 割るばい。(その壺を犬が割るよ。) (OAV)
- c. 犬 {ガ/*ノ} 割るばい。(犬が割るよ。) (AV)

(29) 動物・他動詞（過去）

- a. 犬 {ガ/*ノ} 壺バ壊した。(犬が壺を壊した。) (AOV)
- b. 壺バ犬 {ガ/*ノ} 壊した。(壺を犬が壊した。) (OAV)

c. 犬 {ガ/*ノ} 壊した。(犬が壊した。)(AV)

4.1.2.2. 自動詞述語文主語

続いて自動詞主語であるが、ここでは意志自動詞／非意志自動詞によって主語表示の状況が異なる。まずは意志自動詞から示す。

4.1.2.2.1. 意志自動詞述語文主語

まず意志自動詞主語であるが、これは「ガ」のみで表示され、「ノ」は許容されない(ただし、動詞句に敬辞やアスペクト辞を付す場合は別である。詳細は 4.2 節と 4.3 節で述べる)。

次の例は親族／固有名詞の例であるが、目下の「弟／太郎」を主語名詞句とする(30)(31)と、目上の「お父さん」を主語名詞句とする(32)(33)は全て、「ガ」しか用いられない。

(30) 親族／固有(同等または目下)・意志自動詞(非過去)

明日福岡に {弟／太郎} {ガ/*ノ} 行くばい。

(明日福岡に {弟／太郎} が行くよ。)

(31) 親族／固有(同等または目下)・意志自動詞(過去)

昨日福岡に {弟／太郎} {ガ/*ノ} 行ったばい。

(昨日福岡に {弟／太郎} が行ったよ。)

(32) 親族／固有(目上)・意志自動詞(非過去)

[リレーの順番について]

3番目にお父さん {ガ/*ノ} 走るばい。

(3番目にお父さんが走るよ。)

(33) 親族／固有(目上)・意志自動詞(過去)

[「何番目に走ったの？」の問いに]

3番目にお父さん {ガ/*ノ} 走ったばい。

[3番目にお父さんが走ったよ。]

人間名詞の場合も同様である。目下の「泥棒」を主語名詞句とする(34)(35)と、目上の「先生」を主語名詞句とする(36)(37)は全て、「ガ」しか用いられない。

(34) 人間(同等または目下)・意志自動詞(非過去)

ちゃんと鍵ば閉めとかんと、泥棒 {ガ/*ノ} はいっぱい。

(ちゃんと鍵を閉めておかないと、泥棒が入るよ。)

(35) 人間(同等または目下)・意志自動詞(過去)

泥棒 {ガ/*ノ} 家さん入った。

(泥棒が家に入った。)

(36) 人間(目上)・意志自動詞(非過去)

[リレーの順番について]

3番目に先生 {ガ/*ノ} 走るばい。

(3 番目に先生が走るよ。)

(37) 人間 (目上)・意志自動詞 (過去)

[リレーの順番について]

3 番目に先生 {ガ/*ノ} 走ったばい。

(3 番目に先生が走ったよ。)

動物名詞の場合も同様、「ガ」しか用いられない。

(38) 動物・意志自動詞 (非過去)

ちゃんと閉めとかんと、猫 {ガ/*ノ} はいっぱい。

(ちゃんと閉めておかないと猫が入るよ。)

(39) 動物・意志自動詞 (過去)

猫 {ガ/*ノ} 家さん入った。

(猫が家に入った。)

以上、意志自動詞文の場合を示し、その主語表示には「ガ」しか用いられず「ノ」は許容されないということを示した。

次に非意志自動詞文の場合を示すが、これも主語の一項のみを持つという点では意志自動詞と同様であることから、一見同様の結果が予測される。しかし、非意志自動詞文の主語表示は、これとは大きく異なる様相をみせる。

4.1.2.2.2. 非意志自動詞述語文主語

非意志自動詞文の場合、その主語表示として「ノ」が用いられる。これは、主語名詞句が卑称であってもかわりなく「ノ」が選択される。

ただし、標準語で「ガ」が用いられるということもあり、「ガ」を絶対に許容できないというわけではない。しかし、方言形で全文を作成する場合、筆者およびインフォーマントの内省では「ノ」を用いるのが自然であり、「ガ」を用いると不自然になる、あるいはとりたて、総記の解釈となる。

このような、「ガ」が絶対不可というわけではない、ということはどう処理するかは、方言と言語接触、また言語変化に関わりうる大きな問題であり、さらに方言形か否かは客観的証明が難しいことから、安易な判断は避けるべきところではある。が、今回は以下のような内省判断を優先し、非意志自動詞主語の表示は「ノ」であるとする⁵⁾。

まず親族／固有名詞の例を挙げる。(40) (41) のように主語名詞句が目下であろうが、(42) (43) のように目上であろうが、同様に「ノ」が用いられる。「ガ」は絶対不可というわけではないが、「ガ」を用いると不自然になるか、あるいはとりたて・総記の解釈となる。

(40) 親族／固有 (同等または目下)・非意志自動詞 (非過去)

5) あるいは、方言話者同士の自然談話を採集し、その非意志自動詞文においてノが用いられることが圧倒的に多いことが示せたり、「ガ」の用いられる場合が特殊であることを示したりことができれば、ある程度の証明はできるかもしれない。しかし未だ談話分析に着手しておらず、今後の課題としたい。

あれ、あがんとけ {弟／太郎} {??ガ／ノ} おる。

(あれ、あんなところに {弟／太郎} がいる。)

- (41) 親族／固有 (同等または目下)・非意志自動詞 (過去)

さっき二階に太郎 {??ガ／ノ} おったばい。

(さっき二階に太郎がいたよ。)

- (42) 親族／固有 (目上)・非意志自動詞 (非過去)

あれ、あがんとけ、じいちゃん {??ガ／ノ} おる。

(あれ、あんなところにじいちゃんがいる)

- (43) 親族／固有 (目上)・非意志自動詞 (過去)

さっき庭にじいちゃん {??ガ／ノ} おったばい。

(さっき庭にじいちゃんがいたよ。)

続いて人間名詞の場合も同様である。主語名詞が卑下の対象である「泥棒」でも、尊敬対象の「先生」であっても、同様に「ノ」を用いる。

- (44) 人間 (同等または目下)・非意志自動詞 (非過去)

泥棒 {??ガ／ノ} おる。(泥棒がいる)

- (45) 人間 (同等または目下)・非意志自動詞 (過去)

さっき泥棒 {??ガ／ノ} おったばい。(さっき泥棒がいたよ。)

- (46) 人間 (目上)・非意志自動詞 (非過去)

あれ、あがんとけ、先生 {??ガ／ノ} おる。(あれ、あんなところに先生がいる。)

- (47) 人間 (目上)・非意志自動詞 (過去)

さっきあそけ先生 {??ガ／ノ} おったばい。(さっきあそこに先生がいたよ。)

これは動物や無生物を主語名詞句とする場合も同様である。

- (48) 動物・非意志自動詞 (非過去)

猫 {??ガ／ノ} おる。(猫がいる。)

- (49) 動物・非意志自動詞 (非過去)

猫 {??ガ／ノ} 生まれた。(猫が生まれた。)

- (50) 無生物・非意志自動詞 (非過去)

あれ、あがんとけ、本 {??が／の} ある。

(あれ、あんなところに本がある。)

- (51) 無生物・非意志自動詞 (過去)

さっきあそけ本 {??が／の} あったばい。

(さっきあそこに本があったよ。)

以上のように、非意志自動詞文の主語表示には「ノ」が用いられる。「ノ」による主語表示は他動詞文、意志自動詞文では許容されなかったものであり、明らかな違いである。

また、次に挙げる形容詞文も、非意志自動詞文と同様の結果となっている。

4.1.2.3. 形容詞述語文主語

続いて形容詞述語文であるが、非意志自動詞文と同様、主語表示に「ノ」が用いられる。

「ガ」に関しても、標準語では使用できることもあり、非意志自動詞文と同様に、その容認度は絶対不可というわけではない。しかし、やはり「ガ」を用いると不自然になったり、あるいはとりたて・総記の解釈となったりする。今回は以下のような内省判断を優先し、形容詞述語文主語の表示は「ノ」であるとする。

以下には名詞句の階層、尊卑ごとに例を挙げる。いずれの主語も「ノ」で表示される。

(52) 親族／固有（目上）・形容詞文

じいちゃん {??ガ／ノ} 怖か。(じいちゃんが怖い。)

(53) 親族／固有（同等または目下）・形容詞文

泥まみれだから太郎 {??ガ／ノ} きたなか。(泥まみれで {弟／太郎} が汚い。)

(54) 人間（同等または目下）・形容詞文

a. 泥棒 {??ガ／ノ} 怖か。(泥棒が怖い。)

b. 人 {??ガ／ノ} 多か。(人が多い。)

(55) 人間（目上）・形容詞文

先生 {??ガ／ノ} 怖か。(先生が怖い。)

(56) 動物・形容詞文

猫 {??が／の} 可愛か。(泥棒が可愛い。)

(57) 無生物・形容詞文

a. 水 {??が／の} うまか。(水が美味しい。)

b. 石 {??が／の} ふとか。(石が大きい。)

4.1.3. 熊本市方言における基本アラインメントの整理

熊本市方言では、まずいずれの名詞句階層においても他動詞主語を「ノ」で表示することはできず、「ガ」で表示される。これは語順を入れ替えても、目的語を省略しても、変わらないようである。

次に人称名詞の階層だけをみると、述語のタイプにかかわらず主語表示は全て「ガ」であり、他動詞目的語とは異なるマーキングとなっている。よって人称名詞の階層のアラインメントは、典型的な対格主格型といえる。

しかし、親族・固有名詞以降の階層では、述語のタイプによってマーキングが異なっており、まず他動詞主語・意志自動詞主語は「ガ」でマークされ、「ノ」は許容されない。一方で、非意志自動詞・形容詞文主語は、他動詞や意志自動詞の主語表示としては許容されない「ノ」によってマークされる。

そのアラインメントを整理すると、他動詞主語と意志自動詞主語が同じ括りとなり、非意志自動詞主語と形容詞主語が同じ括りとなる。その主語表示の分かれ方は、多分に活格的と捉えられるが (c.f. 3.1 節の図 1)、しかし一方で、他動詞目的語と非意志自動詞・形容詞述語文の主語が同じマーカーというわけではなく、活格型という認定はできない。このようなケースを類型論的にどのように位置づけるのか、課題の残るところである。

4.2. 敬辞 (-as) を付す場合

次に本節では述語に敬辞を付す場合、特にいわゆる三人称敬辞-as を付す場合を検討する。熊本市方言の-as は、一人称、二人称以外の名詞句であれば無生物を主語にする場合でも用いることができ、主語に対する敬意・親愛をあらわす派生接辞である。

4.2.1. データ

敬辞-as を付すことにより、アラインメントは以下のように変化する。

表2 敬辞-as を加えた際のアラインメント

		人称			親族・固有				人間		動物	無生物			
		一人称	二人称		身内		外		同・下	上					
			同・下	尊	(三人称)	同・下	上	同・下					上		
他動詞	主語	—	—	—	三人称の使用なし	ga	ga	ga	ga	ga	ga	ga	—		
意志自動詞	主語					ga/no	ga/no	ga/no	ga/no	ga/no	ga/no	ga/no	ga/no	ga/no	—
非意志自動詞	主語					n(o)	n(o)	n(o)	n(o)	n(o)	n(o)	n(o)	n(o)	n(o)	n(o)
形容詞	主語					n(o)	n(o)	n(o)	n(o)	n(o)	n(o)	n(o)	n(o)	n(o)	n(o)
他動詞	目的語					ba	ba	ba	ba	ba	ba	ba	ba	ba	—

← S分裂型 / 三立型 →

表2に見るように、敬辞-as を付すことによって「ノ」が意志自動詞まで許容されるようになる。意志自動詞においてガとノのどちらを用いるかという点においては、談話から頻度をみる作業が必要と思われるが、内省では、ノの方をより用いると判断された。用例としては以下のようなものである。

(58) {花子_(妹の名前) / お父さん / 隣の太郎 / 田中先生 / 近所の子供 / 先生 / 犬} {ガ / ノ} 来らした。

({花子_(妹の名前) / お父さん / 隣の太郎 / 田中先生 / 近所の子供 / 先生 / 犬} が来た)

(59) 木に {花子_(妹の名前) / お父さん / 隣の太郎 / 田中先生 / 近所の子供 / 先生 / 犬} {ガ / ノ} 登らした。

(木に {花子_(妹の名前) / お父さん / 隣の太郎 / 田中先生 / 近所の子供 / 先生 / 犬} が登った)

4.2.2. 敬辞を付す場合のアラインメントの整理

当方言では基本配列に見たように、主語名詞句自体の尊卑が「ノ」と「ガ」に影響するわけではないようであるが、敬辞と連動して「ノ」が意志自動詞にまで範囲を広げて現れる点を考えると、いわゆる尊卑説の一端にあるようにも思われる。しかし一方で、敬辞を付しても他動詞述語文の主語表示にまでは「ノ」が用いられないことがないという点からは⁶⁾、尊卑の別の主語表示への影響力は絶対的なものではないようである。

6) 名詞句の尊卑で「ノ」「ガ」を使い分ける方言としては、筆者の調査の範囲では、鹿児島県下甑島手打方言が挙げられる。当方言では、他動詞の場合にも、名詞句が尊敬対象であれば、主語表示として「ノ」を用いる。

例) 二人称 (卑: わい / 尊: おまい)

卑: わいが壺ば割ったたいよーもん。

ただ、今回のデータで注目すべき点としては、「ノ」が意志自動詞にまで拡張することにより、基本配列の分裂型に加え、他動詞主語＝ガ／自動詞主語＝ノ／他動詞目的語＝バという、三者のマーキングが全て異なる「三立型」という配列の性質を備えることになるという点である。三立型は、管見の限り日本語圏においては未だ報告がなく、希少な現象であると考えられる。

また、次節で述べるように、アスペクト辞を付すことによっても、同様に三立型の性質を備えるようである。

4.3. アスペクト辞 (-jor, -tor) を付す場合

次に、アスペクト辞を付す場合を検討する。熊本市方言のアスペクト辞は-jor、-tor であり、基本的に前者は進行相・継続相、後者は継続相・完了相をあらわす。

4.3.1. データ

アスペクト辞を付すことにより、アラインメントは以下ようになる。

表3 アスペクト辞を加えた際のアラインメント

		人称				親族・固有				人間		動物	無生物	
		一人称	二人称		(三人称)	身内		外		同・下	上			
			同・下	尊		同・下	上	同・下	上					
他動詞	主語	ga	ga	—	三人称の使用なし	ga	ga	ga	ga	ga	ga	ga	—	
意志自動詞	主語	ga	ga			ga/no	ga/no	ga/no	ga/no	ga/no	ga/no	ga/no	ga/no	—
非意志自動詞	主語	ga	ga			n(o)	n(o)	n(o)	n(o)	n(o)	n(o)	n(o)	n(o)	n(o)
他動詞	目的語	ba	ba			ba	ba	ba	ba	ba	ba	ba	ba	—

典型的対格型
←
S分裂型／三立型
→

表3では、表1、表2とは異なり、形容詞述語の行を省いているが、これは熊本市方言では形容詞とアスペクト辞が共起しないためである。

まず、人称名詞に関しては、アスペクト辞を付しても主語表示に影響する事はなく、主語表示は「ガ」のみである。

(60) 他動詞・+アスペクト

〔「何の音か」と聞かれ〕

- a. 私 {ガ/*ノ} 餅バ割りよっと。(私が餅を割っているの。)(AOV)
- b. 餅バ私 {ガ/*ノ} 割りよっと。(餅を私が割っているの。)(OAV)
- c. 私 {ガ/*ノ} 割りよっと。(私が割っているの。)(AV)

(61) 意志自動詞・+アスペクト

あの会社には、私 {ガ/*ノ} 勤めとる。
(あの会社には、私が勤めているよ。)

(62) 非意志自動詞・+アスペクト

尊：おまいの割ったたいよーもん

田中の失敗で私 {ガ/*ノ} 困っとる。

(田中の失敗で私が困っている。)

しかし、親族・固有名詞以下の階層においては、意志自動詞の主語表示に「ノ」が許容されるようになる。意志自動詞の例を挙げると、次のようである。

(63) あら、{うちの妹/花子_(妹の名前)/お父さん/隣の太郎/田中先生/近所の子供/先生/犬} {ガ/ノ} {走りよる/走っとる}。

(あら、{うちの妹/花子_(妹の名前)/お父さん/隣の太郎/田中先生/近所の子供/先生/犬} {ガ/ノ} 走っている。)

(64) {うちの妹/花子_(妹の名前)/お父さん/隣の太郎/田中先生/近所の子供/先生/猫} {ガ/ノ} 木に {登りよる/登っとる}。

({うちの妹/花子_(妹の名前)/お父さん/隣の太郎/田中先生/近所の子供/先生/猫} {ガ/ノ} 木に登っている。)

4.3.2. アスペクト辞を付す場合のアラインメントの整理

上記のように、アスペクト辞を付すことで意志自動詞に「ノ」が許容されることにより、他動詞主語＝ガ/自動詞主語＝ノ/他動詞目的語＝バという、三者のマーキングが全て異なる「三立型」という配列の性質を備えることになる。

通言語的に、テンスやアスペクトによってアラインメントが変わるということは良く知られているが (cf. 3.3 節)、なぜ日本語の当方言において、アスペクト辞で主語表示が変わるという現象がおこるのかについては、未だ考察が及んでいない。今後の検討課題としたい。

5. まとめ

本論では、現代熊本市方言における主語マーカの使い分けを記述し、以下の点を指摘した。

- ①主語に立つ名詞句が人称名詞の場合は、述語の性質にかかわらず主語は全て「ガ」で表示される。人称名詞の階層におけるアラインメントは、典型的な対格主格型である。
- ②主語に立つ名詞句が人称名詞以外の場合、述語の性質がガ/ノ表示を決定する要因となる。この場合、他動詞述語文と意志自動詞述語文の主語は「ガ」でマークされ、一方、非意志自動詞述語文と形容詞述語文の主語は「ノ」でマークされる。すなわち、活格的な性質を有する（但し他動詞目的語は「バ」という別表示であるため、「活格型」ではない）。
- ③当方言では更に、敬語接辞やアスペクト辞を述語に付すことで「ガ」「ノ」の使用が変化する。その結果当方言は、一部の文法環境において、日本語としては希少な「三立型」のアラインメントを持つ。

課題としては、基本配列の右の階層、すなわち主語表示が述語の性質によって、他動詞主語・動作動詞の主語と、非意志自動詞と形容詞の主語が分裂していて活格的性質を持つ

が、後者と他動詞目的語が同じマーカーではなく、対格型とも活格型ともいえない本体系を、類型論的にどのように位置づければよいのかという点、そして、なぜ敬辞とアスペクト辞を付すことで意志自動詞の主語表示に変動がおこるのかという点である。今後検討したい。

【参考文献】

- 秋山正次・吉岡泰夫 (1991) 『暮らしに生きる熊本の方言』 熊本日日新聞社.
- 初島康子 (1998) 「佐賀方言の研究—主格の助詞『ノ』と『ガ』の使い分けについて」『東京女子大学言語文化研究』7, pp.51-64, 東京女子大学.
- 加藤幸子 (2005) 「熊本方言における『が』と『の』の使い分けに関して」『言語科学論集』9, pp.25-36, 東北大学大学院言語科学専攻.
- 久野暉 (1973) 『日本文法研究』大修館書店.
- 角田太作 (2009) 『世界の言語と日本語 改訂版 言語類型論から見た日本語』くろしお出版.
- 野村剛史 (1993) 「上代のノとガについて (上)」『国語国文』62-2, pp.1-17.
- 橋本進吉 (1969) 『助詞・助動詞の研究』岩波書店.
- 吉村紀子 (1994) 「『が』の問題」『変容する言語文化研究』, pp.13-28, 静岡県立大学.
- (2006) 「熊本八代方言から日本語を見る—主格「が」・「の」をめぐって」 *Scientific approaches to language* 5, pp.195-221, 神田外語大学言語科学研究センター.
- Dixon, Robert M.W. (1979) Ergativity. *Language* 55: 59-128.
- Garret, Andrew. (1990) The origin of NP split ergativity. *Language* 66: 261-96.
- Harris, Alice C. (1990) Alignment typology and diachronic change. In Lehmann, Winfred P. (ed.), *Language typology : systematic balance in language: papers from the Linguistic Typology Symposium, Berkeley, 1-3 December 1987*, 67-90. Amsterdam : John Benjamins.
- Marlett, Stephen A. (1986) Syntactic levels and multiattachment in Sierra Popoluca. *International Journal of American Linguistics* 52: 359-87.
- Silverstein, Michael (1976) Hierarchy of features and ergativity. In Dixon, Robert M.W. (ed.), *Grammatical categories in Australian languages*, 112-171. Canberra: Australian Institute of Aboriginal Studies.

さかい みか (大阪大学大学院生)

mika.sakai.0923@gmail.com